

『君と二人』 作・岩本憲嗣

■あらすじ

慶応4年。

大政奉還、江戸城無血開城が為され武士の時代が終りを迎えようという頃。人斬りとして名を馳せる鷹真は1年ぶりに故郷に戻る。

そこは師の暮らした場所、無二の親友であり今では師の仇となり果てた辰成と1年前に刀を交えた場所。

そこで鷹真は驚愕の光景を目にする。

空から降る巨大なお釜。

その中から現れた少女と珍妙な生き物。

少女の名は千衣里。

未来から兄を救うためにやってきたのだが、タイムマシンの故障で3年ずれたここに墜落してしまった。

燃料（酒）を集めて3年前に行かねばならないという。

3年前……その言葉が本当ならば師を救えると考えた鷹真は協力を名乗りでる。

こうして始まった燃料集め。

トラブルがあったり、それがきっかけで千衣里が鷹真の過去の因縁を知ったりもあったが順調だと思われた。

だがある晩事件は起こる。

買出しに出た市中で辰成の姿を見つけた鷹真は千衣里を置いて追うものの見失ってしまふ。

そしてその間に旧幕府の保守派残党に千衣里を連れ去られてしまったのだ。

彼らの目的は鷹真に勝海舟の用心棒である男を斬らせること。

苦境の中どうか千衣里を救い出す鷹真だったが、そこで彼は再び辰成に出逢う。

彼こそが保守派が恐れる勝の用心棒だったのだ。

1年ぶりに刃を交える二人。

だが辰成の刀には不思議な力が宿っており全く歯が立たない。

それを見た千衣里は確信する、その刀の力は未来の技術、探し求める兄のそれに違いないと。

千衣里は鷹真の刀に同じ力を宿す。

再度まみえる二人。

決着が着こうという時、勝が二人を止める。

勝海舟だと思われた男……彼こそが千衣里の兄であり、そして亡くなったと思っていた鷹真の師であったのだ。

何故兄が勝になりすましていたのか、自信が死んだと鷹真を騙していた理由は？

本人の口から真実を告げられる鷹真と千衣里。

そして千衣里は辛い決断を迫られる。

だが、鷹真のとっていたある行動がそれを覆し、千衣里に希望の光を齎すのだった。

#### ■登場人物

上川鷹真（かみかわたかざね・18歳・♂・浪人）

坂口千衣里（さかぐちちえり・16歳・♀・空から降って来た少女）

田沼銀太夫（たぬまぎんだゆう・？歳・♂・狸とペンギンを合わせたような謎の生物）

岡田辰成（おかだたつなり・20歳・♂・勝海舟の用心棒）

西尾浩一朗（にしおこういちろう・29歳・♂・鷹真と辰成の剣の師匠）

皐月（さつき・23歳・♀・遊郭の遊女）

大市篤路（おおいちあつみち・♂・20歳・皐月の弟）

紺田吟子（こんだぎんこ・？歳・♀・狐とペンギンを合わせたような謎の生物）

勝海舟

酒屋の主人

やくざ者1

やくざ者2

遊女

#### ○浩一朗の家・外観（夜）

夜空には上弦の月。山深い中に建つ寂れた小屋。小屋の前には小さな池。

鷹真M「気が付けばここに戻ってきていた。あの人のいた、俺たちのいたここに」

旅の途中の鷹真が訪れるとそっと戸を開く。中には人の気配はない。しかし荒

れた様子もない。

鷹真「1年も経つてのにこりゃ……」

鷹真、人の気配に気づき刀に手をかける。鷹真の背後には数十の浪人、そしてそれを率い

る篤路の姿。

篤路「おっと、待ってくれよ。俺らはアンタ

の敵じゃねえ。むしろ逆だぜ。なあ、黒爪の鷹さんよ」

鷹真「その名……人斬りでも頼みにきたか」

篤路「話が早くて助かる。アンタの力が必要なんだ。俺らは薩長の連中に腹見せてキャンキヤン鳴いてやがる腰抜けどもを皆殺しに……」

鷹真「キャンキャンうるせえのはてめえだろ。興味ねえ、消えな」

篤路「つれねえこと言うなよ。折角の客人を傷つけたかねえんだわ」

鷹真「何度も言わすな。さっさと消えろ。ここにゲスイ臭いがしみついちまうだろ」

篤路「んだと！？ちいとばかりし名が立つからって調子に乗るんじゃねえぞ！！」

篤路と浪人たちが一斉に鷹真に斬りかかる。鷹真が刀を抜く。その刀身は黒い。

鷹真、瞬く間に浪人たちの腕を斬りつけていく。浪人たちは刀を落としてしまう。

鷹真「汚ねえ血い零すんじゃねえ。失せな」

篤路「なっ……強え……くそっ！！」

篤路と浪人たちが走り去る。鷹真、血振りをすると空を見上げる。

鷹真「強い？……馬鹿いうな。俺なんて、アイツにだって……！？月が……丸い！？」

夜空に浮かぶ丸い月は徐々に大きくなっていく。それは月ではなく金色に輝く球体をした人工物。空から降り落ちるそれは目の前の池に勢いよく突っ込む。辺りは水浸しになる。

鷹真が再度それを見やる。その形状はまるで巨大なお釜。

鷹真「……巨大な釜、これは……」

巨大なお釜から少女が這い出てくる。し

かし足を滑らせて池に落ちてしまう。

鷹真「落ちやがった……ん？」

鷹真、足元に小さな赤い宝石のようなものが落ちていることに気づく。

### ○浩一朗の家・中

囲炉裏には火がくべられ茶釜が吊るされ

ている。びしょ濡れの服は干されており

全裸の上に着物が被せられている状態

で横たわる千衣里。目が覚める。

千衣里「……ここは……はっ！？ハダカ！？」

隣の部屋から鷹真がやってくる。つかみ

かかる千衣里。

千衣里「アンタ！？どういうことよこれ！全裸・監禁・美少女ってどんだけ屑なワケ？

このド変態！っていうかそもそもここどこ

こ？っていうかアンタだれ！？」

鷹真「落ちた着物を渡し」騒がしいガキだな」

千衣里「あー！ちよつと何見てるの

よ！有料だかんね！一秒3万！！はい1、

2、3、9万円！！」

慌てて着物を羽織る千衣里。

鷹真M「巨大な釜から現れた珍妙な格好をした女。けれど違った。本当に珍妙なのは服装なんかじゃなくて……」

鷹真「たいむましん？」

千衣里「そう、ハゴロモ型の最新鋭機で……」

鷹真「待て待て、何が羽衣だ、どうみてもでっかいお釜だろ。そもそも羽衣って……お前自分のこと天女とでも言いてえのか」

千衣里「そうだもん。あたしは天女。お兄様にとっての……お兄様を助ける為の」

鷹真M「尚もベラベラと禅問答みてえなことを喋り続ける女。内容なんて半分も分からねえけど、何だ、つまりこいつは……」

千衣里「(頭を叩いて) 寝るな馬鹿……」

鷹真「痛っ……叩くことねえだろ。要は“み

らい”とかいう何百年も先から来たって言

いたいワケだろてめえは」

千衣里「違っ」

鷹真「は？だってそう言っ……」

千衣里「そうじゃなくて。さつきからずっとムカついてたんだよね。あたしはてめえなんかじゃない、千衣里」

鷹真「んだよ、そんなことか」

千衣里「そんなことじゃないって……名前があるって大切だよ。だってただのモノには名前なんてつけないでしょ？だから……」

鷹真「モノにだって名前はつけんだろ。例えば刀だとか、こゝろ魂が宿るものつつうか」

千衣里「アンタのそれには名前あるの？」

鷹真「鷹真」

千衣里「タカザネって言うの、アンタの刀」

鷹真「千衣里の頭を叩いて」アンタじゃねえよ、鷹真だ。上川鷹真、この刀にやまだ名前はねえ」

千衣里「鷹真……そうか。今更だけど、助けてくれてありがとう」

千衣里の腹が鳴る

鷹真「まったく、感謝したと思えば飯を要求か？」

千衣里「ち、違っ！これは擬似的なその」

鷹真「俺も腹が減ったところだ。待ってる、丁度さつき狸みてえな鳥みてえなのを捕まえた

んだ。鍋にすんぞ」

千衣里「狸……鳥？あ！！」

鷹真が戸を開けると外から亀甲縛りになった銀太夫が飛び込んでくる。

鷹真「なっ！逃げんじやねえ鍋の具！！」

銀太夫「某（それがし）は具材ではござらん！全環境支援型高性能生体端末にして……」

千衣里「銀太夫！？」

銀太夫「千衣里様！ご無事でしたか！！この銀太夫嬉しくて嬉しくて涙が止まりませんでござ候ううう！！」

鼻水まみれになって余計に絡まる銀太夫。

千衣里「汚い。っていうか何それ？」

銀太夫「必死に脱出を試みたところ逆にかような……得も言われぬ体勢に」

鷹真「この狸鳥はお前のか？」

千衣里「田沼銀太夫。鳥獣型アンドロイド、いわゆるアニマロイドで……」

鷹真「もののけの類か？じゃあ食べねえか」銀太夫「失敬な！だれがものけですと！」

千衣里「落ち着いて銀太夫、それより今あたしたちがどの時代にいるか分かる？」

銀太夫「お任せ下さいませ。ポチっとで候！」

銀太夫、自分のヘソを押すと目から立体

映像が飛び出す。

鷹真「うわっ！」

銀太夫「ここは慶応四年。目的地よりも3年も後の時代のようでごさいますようぞ」

千衣里「は？じゃあお兄様が行方不明になった年じゃ……。んもう！このダメ狸！アンタの操縦が悪いから！」

銀太夫「お言葉ですが千衣里様。アレは謂わば盗んだも同然の品。恐らくは整備も行き届いてなかったが故の事故かと」

千衣里「言い訳はいいからさっさとハゴロモを修理して3年前に……」

銀太夫「その……タンクの破損で燃料が……」

千衣里「何それ？はあ！？どうすんのよ！！」

鷹真「おい。ちよつといいかクソガキ」

千衣里「千衣里！！っていうかアンタにはどうせ分らないでしょ、首つっこまないで」

鷹真「鷹真だつってんだろ。おい千衣里。お前今3年前がどうこうって言ってたな」

銀太夫「いかにも。千衣里様は3年前に向かい行方不明の兄君を救うのが目的……」

鷹真「つまり何だ？あのデカイお釜を使えば3年前に行けるのか？」

銀太夫「されども燃料が。せめてアルコールがあれば私の体内で燃料を精製……」

千衣里「アルコール……そうか、ねえ鷹真！お酒！お酒ちょうだい！」

鷹真「飯の次は酒か？ガキのくせに……」

千衣里「あたしじゃない。ハゴロモだよ。お酒があれば動くんだよアレ」

○遊郭・四十万屋の裏口（夜）

篤路が辺りをキョロキョロしている。そこに皐月がやってくる。

皐月「なんだい、随分情けない顔してるじゃないかい」

篤路「すまねえ姉貴。失敗した」

皐月「んな報告なんて訊きたくないよ」

篤路「言った通りだった。黒爪の鷹の強さは本物だ。アイツなら勝の腰巾着のアイツだつてきつと……」

皐月「そうだね。勝海舟の用心棒。アレが消えりや勝を殺るのなんて容易いもんだ。分かっているならどんな手を使ってでも……」

篤路「待ってくれ。それだけじゃねえんだ。黒爪の鷹とやり合った後なんだけだよ……空からでっけえ釜が降って来やがって」

皐月「釜？」

篤路「でもってそこから女が……」

皐月「へえ……女ね」

○江戸市中

活気溢れる江戸の街。鷹真、千衣里、人間に変化した銀太夫気色悪い銀太夫が来る。

千衣里「すごい、時代劇みたいだ！！」

銀太夫「全くですな。資料と実際に見るのでは感動も雲泥の差。これこそ我々に与えられた特権に他なりません……ぬっ？」

人間化した銀太夫をじっと見る鷹真

鷹真「驚いたもんだ。具材がこんな気色悪い人間になるたあな」

千衣里「アニメロイドはどんなものにも姿を変えられるから。それこそ小さな小物からこんな気色悪い人間にまで」

鷹真「気色悪くない人間にはなれねえのか」

千衣里「それは……まあ元が元だし」

銀太夫「千衣里様まで！某の見目麗しさを妬むのは恥ずかしきことですぞ……」

鷹真「お、見えた見えた。ほらついて来い」

銀太夫「無視ですとお！？」

○酒屋・店内

鷹真 一行が店内にやってくる。辺りの酒を興味深げに眺め出す銀太夫

鷹真 「おい！オッサンいるか!？」

主人 「はいよ……ってタカちゃん？タカちゃんじゃないか!？」

鷹真 「ああ、久しぶりだな」

主人 「本当だよ。懐かしいもんだね。今日も親父さんとお師匠さんのお遣いかい」

鷹真 「おいおいボケちまったかオッサン」

主人 「え?……ああ。悪い、そうだったな、二人はもう……」

鷹真 「気にすんな。それより……」

主人 「でも驚きだ。タカちゃん下戸だったろ

呑める口になったのか?」

鷹真 「いや、俺じゃなくて……」

銀太夫 「なんとっ！薫風爽やかにして口中微

涼を生ずるが如し！ではこちらは……」

気が付くと銀太夫が勝手に酒を飲み比べしている。

千衣里 「何やってんのよ!!」

銀太夫 「ですから燃料を精製する為に……ヒック……ああ、千衣里様これはまずいですぞ。某少々お花畑に……限界ですぞ!!」

千衣里 「は?ちよつと待ちなさいよ!!」

銀太夫が口を押えて走り去る。それを追う千衣里。

主人 「なんだありゃ」

鷹真 「自称天女様だ」

主人 「は?」

鷹真 「案外違ってねえかもしれねえ。もし、あの日を変えてくれるってえならな」

○江戸市中・路地裏

走りくる銀太夫。やくざ者の集団にぶつかってしまふ。

やくざ者 「ん?なんだこの妙なのは」

銀太夫 「だ、誰が妙ですと!?!はっ!なりませぬなりませぬ、某は一刻も早くお花畑に……のおおうっ!?!」

去ろうとする銀太夫を捕まえるやくざ者。

そこに千衣里がやってくる。

千衣里 「銀太夫!!」

やくざ者 「ん?こいつお前の知り合いか?」

やくざ者 2 「こんにやろうぶつかっておいて

詫びの一つもねえんだよ」

千衣里「銀太夫ったら……ご、ごめんなさい」

やくざ者「足りねえな、もっと別な場所で真剣に詫びてくれねえか」

千衣里に歩み寄るやくざものたち。その肩を叩く人影。

○江戸市中・路地裏。

鷹真が走ってやってくる。そこには倒れるやくざ者の集団と無傷の千衣里と銀

太夫。そこから立ち去る人影の姿。

鷹真「これは……ん？アイツまさか!？」

鷹真が人影を追おうとするがそれを止める銀太夫。限界の表情。

銀太夫「後生です……どうか某をお花畑まで……うつ」

路地裏に響く鷹真の悲鳴。

○3年前・浩一朗の家

池の前で剣の稽古をする浩一朗と鷹真。

浩一朗は二刀流。

鷹真「痛たたた。浩一朗さん強えや」

浩一朗「つたり前だ。なんせ俺の太刀は宮本武蔵直伝だ。ははは」

鷹真「またそれかよ。くそっ!もう一丁!」

鷹真M「浩一朗さん。ある日を境にここに住み着いたこの人。どこから来たのか何者なのか何もかも分からない。けれどその気持ちいい性格は多くの人に愛されてたんだ。幕府の側用人であった父上も気が付けばすっかりこの人の虜になっていた。そう、まるで旧くからの友人みたいに。それは俺も同じだった。この人のところに毎日入り浸ってたんだ。だって俺も、この人のことが大好きだったから」

浩一朗を真似て二刀流で殴りかかる鷹真。それをいなす浩一朗。茂みに突っ込んでしまいう鷹真。するとそこには辰成がいる。

鷹真「辰成……お前どうして……」

浩一朗「誰だそりゃ?」

鷹真「岡田辰成。ウチに仕える岡田家の次男坊で、いつも剣術の稽古を付き合ってくれて。でもいつだって手を抜いてわざと負けるんです」

浩一朗「わざとって……そりゃ何でだ?」



辰成「私は奉公人の立場故」

浩一朗「奉公人だからなんだってんだ」

辰成「父が言っておりました。奉公人は主人の刀たるもの。刀は所詮モノです。モノが主人に刃向うなど……」

鷹真「モノだ？そんなこと一度だって……」

浩一朗「おい辰成」

辰成「はい」

浩一朗「辰成には立派な名前がある。名前つてのはそこに魂のある証……俺はそう思ってる。自分の役割なんざ百も承知だけだよ、魂が宿っちまつてる以上、くやらなきゃならねえこと>と同じくらい大切なくやりてえこと>つてのが生まれちまう。なあ、違うか鷹真」

鷹真「ええと……浩一朗さんの言うことは難しく分かんねえけどよ」

浩一朗「分かんねえのかよ」

鷹真「要は俺も辰成も同じ武士。手抜きとかなしで一緒に稽古したい」

辰成「私なんか……」

浩一朗「だとよ、つうわけで今日からお前も俺の門下。いいな」

辰成「え？……しかし」

鷹真「辰成！」

辰成「……はい！！」

鷹真M「辰成は俺にとって無二の親友だった。身分の差なんて関係ない。毎日一緒に剣を交えて汗をかいて。ガキながらに背伸びしてこの国の在り方を語ったり。辰成はいつだって俺の味方。俺はそう信じ切ってたんだ。なのに……」

○上川邸・外観（夜）

門構えも立派な大きな屋敷。出かけよう

とする鷹真、咳き込んでいる。そこに辰成が歩み寄る。

辰成「こんな夜更けにどこに？」

鷹真「父上と浩一朗さんを迎えに」

辰成「先生も？」

鷹真「ああ。父上がうしても一度浩一朗さんを勝先生に会わせたいって宴席を。でも二人とも大酒呑みだからきつと……」

辰成「確かに」

鷹真「きつと絡み酒で勝先生迷惑してるに決まってる。連れ戻さない……」

辰成「ならば私が」

鷹真「奉公人だから……とか言うなよ。んなの関係ねえんだから」

辰成「そうじゃなくて、鷹真風邪ひいてますよね。こじらせて明日稽古できなくなるのはそ

の……嫌だなんて」

鷹真「んなことゲホゲホッ……」

辰成「ほら。じゃあ行ってくるから」

走り去る辰成。

鷹真M「疑うハズなんてないじゃないか。だってこの辰成が……」

○江戸市中・旅籠

血の染みが浮かぶ畳。一人佇む鷹真。

鷹真M「父上と浩一朗さんは帰ってこなかった。冷たくなった二人が見つかった時、そこに勝海舟の姿はなかった。そして勝は今でも生きている。二人は勝を守る為に殺されたのか……それとも勝に……。それだけじゃない。あいつは……。辰成は一体何をしていたんだ。辰成は……。辰成は……」

○浩一朗の家（夜）

池の前に佇む鷹真。辰成がやってくる。

鷹真「辰成……やっぱりここに来たか」

辰成「鷹真にお別れを言っておきたくて」

辰成が刀を抜く。その刀は黒い。

鷹真「それ……浩一朗さんの刀……」

辰成「はい。貰ったんです」

鷹真「まさかお前……父上たちを……」

辰成「だとしたら……どうする？」

鷹真「……俺は……お前を……うわああ!!」

鷹真が木刀で殴りかかる。

○浩一朗の家・中・現在

目を覚ます鷹真。囲炉裏の前には千衣里。千衣里「ウルサイっ!!」

鷹真「え?……あれ……俺は……」

辺りには呑み散らかした跡。

千衣里「覚えてないワケ?買って来たお酒、

無理矢理銀太夫に呑まされて……」

鷹真「寝てたのか?」

千衣里「散々自分の昔話した挙句にね。大変だったんだね、鷹真も」

鷹真「そうか……ちっ」

千衣里「ねえ、ひよっとしてタイムマシンで3年前について来るつもり?」

鷹真「それは……」

千衣里「そうだよね。だからあたしたちに協力してるんですよ。で、お父さんと浩一朗さん  
ってのを助けたい。違う?」

鷹真「……ダメなのか」

千衣里「ダメ」

鷹真「なんでだ!」

千衣里「なんでも!歴史改変は絶対にやったらダメだったのが人間の世界のルールなもの。  
たった一つの改変が世界の歴史の潮流事態を変えかねない」

鷹真「よく分からん」

千衣里「でしょ?あたしも」

鷹真「……は?」

千衣里「正直ちよつとくらい問題ないと思うんだあたしは。あたしのやってるこれだってひ  
よつとしたら改変かもしれないし」

鷹真「つまりは……いいってこと……」

銀太夫「(家の外で) おええええ!……!……!」

鷹真「なんだありゃ!?!」

千衣里「銀太夫。体内に取り込んだアルコールを燃料に生成して吐き出してるの」

銀太夫「あのおええが燃料なのか」

千衣里「そう。っていつてもまだ全然足りない。明日もお酒買いにいかないと。ねえ、お金  
ってまだある?」

鷹真「金か……どうにかしよう」

鷹真が懐から拾った宝石を取り出しみつめる。ふと窓から外を見る。外には昨日より満  
ちた上弦の月。

○勝の屋敷・中庭(夜)

中庭から月を愛でる勝。手には盃。そこに辰成がやってくる。

辰成「また水ですか」

勝「禁酒してるから気分だけね。ははは」

辰成「件(くだん)の大釜ですが、やはり仰られているものに間違いないかと」

勝「やっぱり?しかも壊れてないんですよ、

じゃあ使えるってことか」

辰成「使うのですか?」

勝「んな無粋なことしないよ。でも他人に使ってもらうワケにもいかないんだよね」

辰成「ならば火を放って……」

勝「ダメダメ。そしたらあの子らも使えなくなっちゃう。とりあえずは様子見しましよ。

燃料が集まるまではまだかかるだろうし」

辰成「それからもう一つ不穏な動きが」

勝「暗殺……とか？」

辰成「はい。新政府に恭順したと不満を抱く者たちが先生のお命を」

勝「そうか……じゃあ辰成が全力で守ってくれたらいいよ。はははは」

辰成「もちろん」

勝「ほら見てご覧よ。月が綺麗なもんだ」

辰成が空を見上げる。空には上弦の月。

○江戸市中（夜）

空には満月が浮かぶ。鷹真、千衣里、人間に変化した銀太夫がやってくる。

銀太夫「ささ、早く酒を買ってしましましょう。恐らくあと1、2回で燃料は……」

千衣里「ちよい待った！！ねえ鷹真、あれってお祭り？」

鷹真「みたいだな」

千衣里「よし！お酒はまた後で。お祭り観に行こうっ！！」

銀太夫「こらあ！千衣里様に触れるとは不貞でござ候っ！！」

千衣里が鷹真の手を引っ張って去る。それを追う銀太夫。

○江戸市中・縁日

多くの屋台が出て賑わう市中。

千衣里「団子……寿司……天麩羅……ガマの油！？はあ？なにこれ！」

鷹真「何って……縁日だろそりゃ」

千衣里「こんなの違う！焼きそばは？お好み焼きは？綿飴は？型抜きは？あたしアレめちやめちや得意なんだから！！」

鷹真「（少し笑って）は？」

千衣里「笑った？鷹真が笑った！いつも仏頂面でブリブリムスムスしてる鷹真が」

鷹真「んなことあつか」

銀太夫「ではブリブリムスムスの間をとってブスブスとしましょう。ブスブス鷹真！」

鷹真「てめえやっぱ鍋にすんぞ！」

千衣里「ひよっとして縁日好きなの？」

鷹真「いや、ちよっと昔をな。浩一朗さんと来た時も同じようなこと言ってたなって」

千衣里「なるほど」

鷹真「なんだよニヤニヤして気色悪い」

銀太夫「ですかわ某は……」

千衣里「呼んでないひっこんで。いやね、鷹真はその浩一朗さんっての話をすると顔が優しくなるなってさ」

鷹真「そんなこと……」

千衣里「いいじゃん別に。あるよそういうの。大切な人の名前を口にすると安心するってい

うかさ……きっと言霊の力ってどうか、その人の名前を口にする事で、その魂が近くに感じられるような気がするんじゃないかな」

鷹真「浩一朗さん……」

千衣里「あたしも同じ、お兄様……」

鷹真「そういや訊いてなかったな。千衣里の兄貴ってのは何でそのたいむとらべるして来たんだ」

千衣里「本当の歴史の記録を残す為。それがあたしたちの存在理由だもの」

鷹真「それが千衣里のやらなきやならないことか……じゃあ兄貴を連れ戻すつてのが千衣里のやりたいことつてことか」

千衣里「え？……そうなのかな。うん、そうだよね、ずっと一緒にいた人だから、助けたいつて……おかしいんだけどね、あたしなんかそんな考えするつてのが本来」

鷹真「何もおかしかねえだろ。大切な奴を助けたい、人なら誰だって思うこつた」

千衣里「人なら……そうだね」

銀太夫「少々近づきすぎではありませぬか、ブスブス殿」

鷹真「黙れ具材！……なっ！？」

人混みの中に辰成の姿を見つける。鷹真、とっさに走りだす。

千衣里「ちょ！どこ行くわけ！？」

銀太夫「ぬっ……もしやブスブス鷹真殿……」

千衣里「なに？」

銀太夫「お花を摘みに行ったのでは？」

千衣里「あのねえ。ほら、あたしたちも追うよ……ひやっ！」

千衣里、急に腕を掴まれる。腕を掴んだのは篤路。

○江戸市中・人気がない通り

刀を抜いた鷹真が走ってやってくる。しかし誰も見当たらない。

鷹真「ありや間違いない……（抜刀していたことに気づき）俺は……斬ろうとしたのか」

そこに慌てた様子で銀太夫がやってくる。

銀太夫「ぶ、ブスブス殿！！」

鷹真「黙れ具材！ん？千衣里はどうした？」

銀太夫「千衣里様が連れて行かれました！！」

鷹真「おい、本当かそりゃ」

銀太夫「どうか千衣里様をお助け下さい！この銀太夫何でも致します。脱ぎます魅せます尽くしますから何卒おお！」

鷹真「いらねえよ。で、連れ去つた奴は？」

銀太夫「分かりませぬ。ただ、四十万屋という遊郭に来いと……」

鷹真「ついて来い具材!!」

○遊郭・四十万屋前

鷹真と銀太夫が騒ぎを起こしている。

鷹真「だから中に入れろっつってんだろ!!」

遊女「お兄さんたち持ち合わせあるわけ？」

銀太夫「今はございませぬ。しかし！千衣里様の為ならこの銀太夫脱ぎます魅せます尽くし  
ましようぞ!!」

鷹真「逆効果だろそりゃ!!」

そこに皐月がやってくる。

遊女「皐月さん？」

皐月「あらあら、託（ことづけ）が足りてないようで御免なさいね。お待ちしてましたよ、  
黒爪の鷹さん」

鷹真「てめえ……」

皐月「ささ、こちらへどうぞ」

○四十万屋・中庭

庭の木に縛られている千衣里。篤路が刀を突きつけている。辺りを囲む浪人たち。

銀太夫「千衣里様!!」

鷹真「千衣里!!」

皐月「（手をとって）少しお待ちなさいよ。不出来な弟ですから、あんまり近づくと命令  
なんて忘れて殺しちやいかねないでしょ」

鷹真「何が目的だ」

皐月「勝の用心棒を斬って欲しいんですよ」

鷹真「興味ない。俺の刀はただ一人の男を斬る為のもの」

皐月「そう言って京では散々人斬りしてきたんじゃないか？」

千衣里「鷹真が人斬り……」

鷹真「全部はアイツを斬る為のものだった。それが見当違いだったただけだ」

皐月「わざと誤った話を伝えて利用されているとも知らず斬り続けた」

鷹真「何が言いたい!!」

皐月「そこを言うところのお話は貴方の為にもなるんじゃないかと。訊けば貴方、側用人だっ  
た父を殺されているでしょ、勝との会席の場で」

篤路「そりゃきつと勝に殺されたんだ。あいつは父の仇だ!!」

鷹真「んなの知るか！知ってるですりゃ……そりゃアイツだけだ。だから俺は……」

皐月「ねえお願い力を貸して。あの用心棒さえいなくなれば……」

鷹真「悪いな。聞く耳持たねえよ!!」

鷹真が篤路に斬りかかる。浪人たちが一斉に鷹真に斬りかかる。それらを蹴散らす鷹真。千衣里の縄を斬る。

鷹真「逃げる千衣里!!」

鷹真、次々と浪人たちを蹴散らす。隙をみて篤路が一閃。しかしみごとにいなす。篤路はそのまま茂みにつっこんでしまう。

千衣里「鷹真!!」

皐月が千衣里を捉えて短刀を突きつける。横で伸びている銀太夫。

鷹真「てめえ………つたく役立たずの具材が」

皐月「あんまり手を焼かせないで頂戴。さあ

勝の用心棒を斬ると約束………」

二階から辰成が飛び降りる。そのまま皐月を峰打ちで一閃。倒れる皐月。鷹真の元に逃げる千衣里。

辰成「大声でするものではないでしょう。私を殺める相談など」

鷹真「………てめえ」

辰成「………1年ぶりですか。鷹真。おや、その刀………浩一朗さんの物真似ですか？」

鷹真「黙れ!俺は………1年前とは違う!!」

鷹真が辰成に斬りかかる。連撃をかわす

辰成。一瞬の隙を突いた鷹真の一撃に刀

を抜いて防御。その太刀もまた黒い。

千衣里「まさかあの人が鷹真の言っていた?」

辰成「色を塗っただけの紛い物では………本物のこれには敵わないですよ!」

辰成が刀を振る。辺りを衝撃波が襲う。飛ばされる鷹真。辰成の黒い太刀には光の文字のような記号のようなものが無数に浮かび上がっている。

千衣里「嘘!?!」

鷹真「なんだありゃ………くそっ!!」

鷹真が辰成に斬りかかる。しかし辰成は容易くそれをあしらう。バランスを崩した鷹真に辰成が一閃。しかし千衣里が鷹真を庇い鷹真は無傷。しかし千衣里は背中に致命傷を負う。

鷹真「なっ………おい………てめえなんで………お

い………おい千衣里!」

辰成「しまった………」

鷹真「おい辰成………今度は………今度は千衣里かよ!てめえなああ!!」

千衣里「ウルサイっ!!」

立ち上がる千衣里。傷口からは血は出ていないが機械のようなものが見える。

鷹真「それ………」

千衣里「少し黙ってて。あたしはこいつに訊きたいことがあるの。その刀の持ち主………生き

てるよね。今どこにいるの」

辰成「何を世迷言を」

千衣里「ううん、証拠だってあるもん」

千衣里、鷹真の両手を握る。

千衣里「個別生体識別機能オフ。絶対支配組成体収容域を開放。当該の無機物の支配に要する必要構成組織量を計測……放出の後……同化!!」

千衣里の両手から放たれた光が鷹真の握る刀を包む。光が収まると先程まで黒かった刀は白く変化しており、光り輝く文字のような記号のようなものが浮かんでいる。

鷹真「お、おい千衣里!？」

千衣里「ほら何やってんの!鷹真の出番じゃないの!？」

鷹真「……だな」

鷹真が辰成に斬りかかる。辰成応戦。しかし今度は互角の戦い。

辰成「これは!？」

千衣里「鷹真の刀にはあらゆる環境情報を分析・演算処理して最適な太刀筋を導く機能を付加したんだから。お兄様の作ったアンタのそれと同じ風に!!」

鷹真「お兄様の……は?」

千衣里「余所見しないで!鷹真はこれだけ分かってくればいいから!演算をするにはその太刀の観測者が不可欠。アイツがああ刀を使ってるってことはどこかでこれを見てるってこと。そう……その刀の本当の持ち主が」

鷹真「まさか……浩一朗さんか!?おい辰成どうなんだ!!」

辰成「……鷹真には……話すワケには……」

鷹真が辰成の隙をついて一閃。勝が現れてそれを右腕で防御する。傷からは無血。

勝「ははははは、ちよいタンマ」

鷹真「邪魔するどてめえも……」

銀太夫「ぬおああああ!!」

急に目を覚ました銀太夫が暴れまわる。

鷹真「何なんだてめえは!!」

銀太夫「千衣里様!臭います!臭いますでござ候っ!この悪臭……我が宿敵の臭い。おりますぞ!近くにあのもののけが!!」

吟子「お黙り狸畜生!!」

勝の顔がマスクのように剥げ落ち、そのマスクは狐ともペンギンともつかない生き物(吟子)に変化する。

銀太夫「畜生とは失敬な!毛玉女などに言われる筋合いありませんぞ!そうぞいませよう、千衣里様……千衣里様?」

千衣里「みつけた」





千衣里「ねえ……これから先って……やっぱ  
り無理……なんだよね」

吟子「千衣里様……」

浩一朗「歴史を守らないといけない。それが俺のやらないとならないことだ」

千衣里「でも!!」

銀太夫「なりませんぞ千衣里様。兄君の不退転のご意志、何卒ご理解の程を!!」

吟子「でもラッキーでしてね。着陸したのが池の上だったなんて」

吟子がタイムマシンの中に入る。

鷹真「……なんでそんな顔してる。折角兄貴に会えた、これからずっといられるだろ」

銀太夫「それはなりません。我々の役割は歴史の記録。今でこそそれを破って独断でここに  
おりますが、また元の時代に戻って次の使命を……」

鷹真「やらなきゃならぬこと……ってことか。その為にてめえはやりたいことを忘れたフ  
リするワケか。まったくめえって奴は……本当てめえは……」

千衣里「違っ!!……てめえじゃなくて千衣里……あたしには名前が……」

鷹真「名前もありや魂だってあんだろー千衣里はモノなんかじゃねえだろ!だったらいい  
じゃねえか、千衣里のやりたいこと無理に通してみたってよ!!」

千衣里「……そうだね。ありがとう。でも……やっぱそれは無理なんだ」

鷹真「……千衣里……ったく。分かったよ、好きにしな。でも俺はてめえはモノなんて認め  
ねえ。だから名前を置いてけ」

千衣里「え?」

鷹真「俺のこの刀……命名した、今日からこいつは千衣里だ」

浩一朗「鷹真……」

千衣里「そうか……じゃあ抜かないでね」

鷹真「は?なんでだよ」

千衣里「そんなに千衣里の裸がみたいわけ?」

鷹真「なっ……」

辰成「鷹真の負けですね」

銀太夫「さあ、燃料も先程満タンにしました故、そろそろ元の……」

吟子「はああああ?何よこの狸畜生!?!」

銀太夫「ち、畜生とは失敬な!」

吟子「ちよつと、どこにも見当たらなくってよ、コアストーン」

銀太夫「そんな馬鹿な……馬鹿でござ候うっ!よもや池に?さささ探さねば!」

鷹真「何そんなに慌てる?」

千衣里「タイムマシンを動かすのに必要なコアストーンがないって。赤い宝石みたいな」

鷹真「あ」

浩一朗「ん?どうした鷹真」

鷹真「……それ、多分見た事あるわ」

辰成「それはよかった。一見落着ですね」

千衣里「で、どこに？」

鷹真「いや、酒を買う金がなかったからその……売った」

銀太夫「のああああ!!!」

辰成「ならば早急に戻しましょう……え？」

辰成を止める浩一朗

千衣里「鷹真の馬鹿」

鷹真「わ、悪い」

千衣里「馬鹿」

鷹真「本当にすまん」

千衣里「馬鹿……馬鹿なんだから」

鷹真「だから……ん？千衣里……何で笑ってやがるんだ？」

千衣里「え？そんなこと……そうだ、きっと大切な人の名前を口にしたからだよ」

鷹真「は？」

千衣里「馬鹿って……目の前の馬鹿を」

吟子「帰りたくても帰れないなら仕方ないんじゃないか」

浩一朗「まあルールを破るワケにもいかねえからな。千衣里、当分はコアストーンを探してまわれ。この江戸……いや、これから東京になるあの街は面白いことがワンサカ転がってるぞ」

千衣里「うん、分かった。じゃあ責任とって手伝ってよね」

鷹真「は？俺が？……仕方ねえなじゃあ行くとするか、なあ千衣里！」

千衣里「あ！ちよっと!!」

鷹真が刀を抜くと走り去る。千衣里がそれを追いかける。池に反射した眩しい陽光が二人を照らす。

【終】

#### ※ご利用上の注意※

- ・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までメール一報頂けますようお願い致します。
- ・ 但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・ 連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・ 仲間内で集まっでの練習でのご利用。
- ・ Skype などを紹介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・ 連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

[gumbal227@hotmail.com](mailto:gumbal227@hotmail.com) (岩本)